



TITLE:

<雑録>大金を掘り出した話

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <雑録>大金を掘り出した話. 東洋史研究 1941, 6(4): 295-295

ISSUE DATE:

1941-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/145742>

RIGHT:

囚遼陽・廣寧諸處歸順之明神衿、屢煽惑降民、潛引叛逃、盡祭誅之、編其戶口、每十三壯丁一莊、按滿洲各官品級、分級爲奴」と言へるものである。

④9 老檔卷七、天命三年十月二十日。

⑤0 例へば第一期は對明戰開始以前に、第二期は明より遼東を奪取せんとする明との交戦期に、第三期は明より奪つた遼東を確保せんための明との交戦期にと略々合致して居り、又第一期は平城的都城ではあつたが、なほ長白山系の溪谷

の間なる寧古塔城・赫圖阿喇城等を都城とした田舎大名の時代であり、第二期は界藩城・薩爾濟城と遷移を續けて、軍事的意圖を發揮した山城の都城時代に當り、第三期は南滿洲の大平原へと乗り出して、政治的經濟的意圖をも併せ示した遼陽城・東京城・瀋陽城等の平城的都城を營み、後金國の磐石の基礎を搖ぎなきものと定めた時代に相當る。

— 二六〇・一二・五 —

## 大金を掘り出した話

昨年（一九三四年）の春、大冶の鐵山を見學に行つた時である。石灰窑附近のある地點から多數の銅錢が發見されたので、是非見に行つてくれとのことであつた。早速、同地の警備隊を訪ねてみると、庭一面に列べられた何十といふカマスに入つてゐるのがそれだときかされて、餘り量の多いのに驚いたのであつた。石灰窑の町から東を見ると、山のはしが突如急な絶壁をなして江中に突き出してゐる所がある。これが有名な西寨山で、三國の昔、周瑜が曹操を破つたといはれる所だ。その西よりに道士嶽といふ部落がある。銅錢の出土地は、この山と部落の中間、道路に沿つた墓地にある池のほとりだとのこと。別に何等の標識もなく、たゞ金銀財寶が埋もれてゐるといふ古老の言傳へがあるだけであつたが、村民は後の祟りを恐れて今まで誰も手をつけるものがなかつた。發掘者の言によれば、地下四尺許りの所に、六尺四方、厚さ四尺に亘つてぎつしり、整然と列べられてゐた、箱に入れたあつた形跡もなく、また伴出物も見當らなかつたと。重さにして約十噸、トラック三臺に積んで歸つたといふ。調べてみると元豐通寶、宣和通寶、政和通寶、聖宋元寶、最も新しいのが崇寧通寶、何れも北宋末期のもので、南宋の錢は全くなかつた。恐らく、北宋の末、金軍侵入の際、當地の豪族が南に逃げるため、重い銅錢を地中に埋めたのであらう。さうして終に戻つて來て掘り出す機會を失つたものに違ひない。（日比野丈夫）